

終末主日礼拝説教「あなたが退位する日に」

日本基督教団石神井教会 2018年11月25日

【旧約聖書日課】サムエル記下 5章1～5節

¹イスラエルの全部族はヘブロンのだビデのもとに来てこう言った。「御覧ください。わたしたちはあなたの骨肉です。²これまで、サウルがわたしたちの王であったときにも、イスラエルの進退の指揮をとっておられたのはあなたでした。主はあなたに仰せになりました。『わが民イスラエルを牧するのはあなただ。あなたがイスラエルの指導者となる』と。」

³イスラエルの長老たちは全員、ヘブロンのだビデのもとに来た。だビデ王はヘブロンで主の御前に彼らと契約を結んだ。長老たちはだビデに油を注ぎ、イスラエルの王とした。

⁴だビデは三十歳で王となり、四十年間王位にあった。⁵七年六か月の間ヘブロンでユダを、三十三年の間エルサレムでイスラエルとユダの全土を統治した。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 15章20～28節

²⁰しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂とされました。²¹死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。²²つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。²³ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している人たち、²⁴次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を減らし、父である神に国を引き渡されます。²⁵キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。²⁶最後の敵として、死が減らされます。²⁷「神は、すべてをその足の下に服従させた」からです。すべてが服従させられたと言われるとき、すべてをキリストに服従させた方自身が、それに含まれていないことは、明らかです。²⁸すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。

【福音書日課】ルカによる福音書 23章35～43節

³⁵民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」³⁶兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、³⁷言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」³⁸イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。

³⁹十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」⁴⁰すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。⁴¹我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」⁴²そして、「イエスよ、あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください」と言った。⁴³するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

眠りに関する人たちの初穂

教会暦の一巡りは、伝統的に、クリスマスの前四週の「待降節(アドヴェント)」から始まり、「終末主日」をもって終わるものとされてきました。今日は、その一巡り最後、「終末主日」と呼ばれる日曜日ですが、わたしたちには、「収穫感謝日」という呼び名のほうが聞き慣れたものであるかもしれません。北米の「収穫感謝祭」を宣教師たちが紹介して広まったというばかりでなく、わたしたちの生きる国にも、この季節の収穫感謝を祝う習慣があったことが、教会に「収穫感謝日」を設けさせることになったのでしょう。

わたしたちの教会では、農業の営みに関わられている方がいらっしゃいますので、時折、季節の実りのおすそ分けをいただくことがあります。とは言え、ほとんどの者は、農業と直接かかわることのない生活をしているというのが、実情でしょう。ですから、わたしたちの教団が「収穫感謝日」を設けていても、その日に合わせて「収穫感謝献金」を献げるというような習慣は、必ずしもどこの教会でも行っているわけではありません。わたしどもの前任地教会では、この季節に「初穂献金」と表書きされた封筒が配られて、収穫感謝の献金を献げる習慣がありました。「初穂献金」というのは、どうも神道で神社に奉納される「初穂料」に倣って付けられた呼び名のようですが、聖書の中に、それに相当する献げ物に関する記述がないわけではありません。申命記 26 章に、イスラエルの民が神に与えられた土地では、あらゆる地の実りの初物を神に捧げて、信仰の告白をするべきことが教えられています。「初物は神のもの」という考え方が、聖書にはあるのです。

収穫の初穂が与えられたことに感謝し、初物を神に捧げるという習慣は、その初穂に続く実り、初物から始まる豊かな収穫が期待されているからこそなされてきたことでしょう。使徒書日課(コリントの信徒への手紙一)で、使徒パウロは、キリストが**「眠りに関する人たちの初穂」**であると言っています。キリストが「初穂」だというのは、第一に神に捧げられるべき「神のもの」であるということでしょう。そして、その「初穂」に続く同じような実りが与えられるということでもあるのでしょう。「**眠りに関する人たち**」も、キリストに続く実りとして、神に捧げられ、「神のもの」にされる、ということです。

この一週間で、わたしたちの教会は、二人の方の訃報に接し、今晚と明日も葬りの営みをいたします。お一人は教会員、もう一人の方は、他の教会で幼児洗礼を受けられていたようですが教会生活はなさっていなかった方です。「終末主日・収穫感謝日」に合わせるようにして教会で葬りを営むのは、一昨年、昨年に続くことです。「眠りに関する人たち」、つまり死者の葬りは、季節を選んで起こるわけではありません。けれども、そのときを神がお定めになられているということも、確かなことでしょう。地上の生涯を終えられた人を、初穂であるキリストに続く実りを結ばせた者として、わたしたちの手から神の御手にお渡しし、神のものとしていただく。わたしたち教会の行う葬りの営みに、そのような意味があることを心に留めるようにと、神がお示しになられているのかもしれません。

油を注がれた者

地上の生涯は、人それぞれです。長い人生を歩む者もあれば、短い生涯を終える者もいます。最期まで多くの人に影響を与え続ける人生を送る者もいれば、人知れず生涯の日々を閉じる者もいます。わたしどもは、牧師として葬儀を執り行わせていただくときに、故人の生涯の歩みを辿らせていただくことがあります。しかしながら、その人生の日々を紹介しようとするならば、生涯で多くのことを為して来られた方のことと、これと言った特別なことを為されることもなく生涯を歩んでこられた方のことを、同じように語るのは難しいことです。

旧約聖書日課（サムエル記下）に描かれるダビデは、その生涯に紆余曲折がありました。三十歳で王となり、四十年間イスラエルとユダの国に君臨し、多くの人に憶えられながら穏やかな死を迎えた人です。一方、福音書日課（ルカによる福音書）に伝えられるイエスは、やはり三十歳で宣教活動を始め、「ダビデの子」と呼ばれながらも、その地上での活動はせいぜい三年ほどで挫折し、国家権力によって反逆者の一人のように処刑された人でした。わたしが、この二人の人物の葬儀を執り行うように依頼されたなら、どちらの場合に多くの言葉でその人の生涯を語るができるか、皆さんにもご想像いただけるでしょう。

けれども、どのような生涯を送られた方にも「死」が訪れることは、確かなことです。そのとき、わたしたちは、死を迎え「眠りについた人」の、地上に残した実りに目を向けるだけなのではありません。むしろ、「眠りについた人」が、神の収穫の実りとして天に引き上げられているさまにこそ、目を向けるのです。

もちろん、そうだとすると、地上の生涯で為されたことは何の意味も価値もない、と言うのではありません。むしろ、地上の生涯で為されたすべてのことをも、神は、「眠りについた人」のものとしてご自身の御手にお取りになられるはずで、そして、そこで、御目にふさわしい収穫の実りをご自身のものとしてくださるのでしょう。そうであればこそ、聖書の世界の人々は、地上の生涯そのものこそが神の御目にふさわしいものとされることを願って、生きたのです。

ダビデは、王として即位するときに、油を注がれました。それは、即位のための一つの儀式に過ぎないことだったかもしれませんが、ダビデにとっては、一つのことを確かめる儀式であったに違いありません。ダビデは、まだ少年のとき、父の羊の群れの世話を手伝っているような頃に、一人の預言者に呼ばれて、油を注がれるという経験をしました。それは、「あなたは神に選ばれた者だ」という宣言を受ける経験だったのです。もちろん、ダビデは、その経験をすばやく王になったわけではありません。ただ、当時のサウル王に仕える者となりました。ダビデは、サウル王もまた預言者に油を注がれて、「あなたは神に選ばれた者」との宣言を受けて生きてきた者だと知っていたからです。サウル王に疎まれることがあっても、ダビデは、油注がれた者であるサウル王に敬意を払い続けました。ダビデ自身も、預言者に油注がれ、「神に選ばれた者」として生きるようにされた者だったからです。ダビデは、そのようにして神の御目にふさわしい者として生きることを願ったのです。

「あなたは今日わたしと一緒に…」

わたしたちは、十字架の上で死なれた主イエスのことを、「キリスト」と呼びます。「キリスト」とは、「メシア」と同じ意味、「油注がれた者」という意味です。主イエスもまた、ダビデと同じように油注がれた者、神に選ばれた方であったと、わたしたちは信じて、「キリスト」とお呼びするのです。

その「キリスト」を、わたしたちは、「眠りについた人たちの初穂」だと信じているのです。「眠りについた人たち」も、「キリスト」に続く「油注がれた者」、神に選ばれた者だ、と信じているのです。

それはつまり、地上の生涯を終えられた方の、その生涯の日々を、わたしたちは、「油注がれた者」としての生涯として憶え、「神に選ばれた者」として負った生涯の使命に目を向ける、ということなのではないでしょうか。

福音書日課が伝える主イエスの十字架刑の場面に、多くの人々が描かれています。十字架を取り囲んだ人々は、十字架につけられた罪人をあざ笑って、侮辱、ののしっています。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい」。並んで十字架につけられた犯罪人の一人も、同じようにののしっています。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」。

この人は、公式の記録では、帝国への反逆人の一人として十字架刑で処刑された、と記されただけだったかもしれませんが、いいえ、その記録さえ、いつしかゴミにまみれて失われてしまうようなものだったでしょう。

けれども、この十字架で処刑された方の隣にいて、この方と共にあろうとした者がいました。「イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」と語ったという者です。彼は、そう願うことによって、主イエスと共に、「神からのメシア、油注がれた者、神に選ばれた者」として実りを結ばせることを願ったのでしょう。それは、しかし、人々からあざ笑われ、侮辱され、ののしられるような者となることでもあったはずです。「おまえは他人を救ったかもしれない。しかし、自分を救えなかった」と。

わたしたちは、この者と共に、十字架につけられた主イエス・キリストの隣に共にあろうとしているのです。油注がれた者、神に選ばれた者として、キリストと共にあろうとしているのです。それは、ダビデのような「王」と誉めそやされる者になることではありません。「王」として即位するしるしとして油注がれた者になることはありません。むしろ、この地上で「王」であろうとすることを辞めるしるしとして、油注がれた者となるのです。いいえ、あの十字架につけられたお方、主イエス・キリストこそが真に神の御目になつた「王」とであると信じて、この方に連なることを願うのです。

地上の生涯のどこかで、この油注がれた者のしるしを受けることができるならば、幸いです。その生涯の初めであろうと、その終わりであろうと、油注がれた者として生きることを願った者を、神は、御目におぼえ、御手のうちに引き上げてくださるのです。神の収穫の実りとして御手のうちに取り、祝福してくださるのです。